

# あの奇跡の発見から1年 大発見がつつづく松帆銅鐸!!

昨年4月に南あわじ市内にある工場の砂置場で見つかった弥生時代前期〜中期に作られた7個の銅鐸『松帆銅鐸』。

大発見がいくつもあり、考古学者からは「国宝級の資料」と注目されています。今回は、松帆銅鐸の7つの大発見をご紹介します。

1

一番古い形の銅鐸だった



▲菱環鈕式の銅鐸

発見された7個の銅鐸のうち1個は、全国でも1例しかない最古級の菱環鈕式という形の銅鐸でした。淡路島では江戸時代初めに洲本市中川原からも1個見つかっています。

2

舌も一緒にたくさんあった



▲青銅製の舌

それぞれの銅鐸の中には青銅製の鳴らすための棒(舌)が入っていて、合計7本見つかりました。

これまでに銅鐸と舌が一緒に見つかることはほとんどなく、南あわじ市松帆慶野で出土した「中の御堂銅鐸」と、鳥取県で出土した「泊銅鐸」に次いで3番目の例になりました。

※青銅器とは、銅・鉛・すずを混ぜ合わせて作られた金属器。弥生時代に中国大陸から技術が伝わり、日本でも作られるようになりました。作られた当時は、金色をしていました。

3

ヒモが残っていた



舌には吊り上げるための植物で作ったヒモが残っていました。銅鐸の原料である銅の防錆作用が働いて、腐らずに残ったと考えられます。ヒモが確認できたのは全国で初めてのことです。



写真:奈良文化財研究所

銅鐸とは・・・

弥生時代に使われていた青銅器のひとつで、農耕のお祭りに使った道具と考えられています。高さ20〜140センチメートルの釣鐘形をしたベルで、上部には半円形のつり手と、両横には鱗(うろこ)があります。はじめは風鈴のように中に棒(舌)を吊り下げて鳴らしていましたが、新しくなるにつれて飾りが増えて大きくなり、見るための祭りの道具に変化してきました。

## ■松帆銅鐸の形式および文様

区分	型式	文様	備考
1号	菱環鈕2式	横帯文	菱環鈕式で初めて舌を伴う
2号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	1号内に入れ子
3号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	
4号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	3号内に入れ子
5号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	舌は別の銅鐸のもの可能性あり
6号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	
7号	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	6号内に入れ子



4

大量に見つかった

兵庫県は銅鐸の出土数が全国で一番多い県で、松帆銅鐸を含め68個出土しています。そのうち、淡路島では21個が見つかっています。松帆銅鐸は全国で4番目に多くまとまって見つかり、特に古い銅鐸が一度に大量に埋められた珍しい例です。

6

入れ子の状態で発見された

発見されたとき、1号と2号の銅鐸、3号と4号の銅鐸、6号と7号の銅鐸は、入れ子になっていました。入れ子とは、大きな銅鐸の中に小さな銅鐸が入っている状態のことです。なぜ、入れられていたのかはわかっておりません。



▲3・4号銅鐸(左)と6・7号銅鐸(右)の入れ子

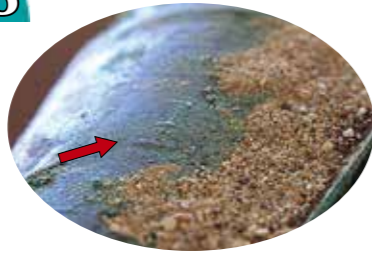
7

特別な場所だった

松帆銅鐸が見つかった砂山は、もともとは南あわじ市松帆地区の田などの下から採った砂です。その近くからは、江戸時代初めには慶野中の御堂銅鐸や、昭和41年には14本の古津路銅剣が見つかっています。この海岸に近い地域は青銅器を埋めるところとして特別な場所だったようです。

5

鳴らす銅鐸だった



▲「E」の形をした模様も発見

松帆銅鐸は何度も音を鳴らしたために、舌と内側が非常にすり減っている部分があります。

このことから古い時期の銅鐸は音を聞く銅鐸であることがわかりました。

銅鐸を鳴らしてみよう♪

古代の音色を聴いてみよう♪

松帆銅鐸復元品を市役所入口に展示中

南あわじ市教育委員会は、市民の皆さんに古代の音色を聴いていただくため、松帆銅鐸の復元品を制作し、市役所本館入口に設置いたしました。

復元された銅鐸は、松帆銅鐸の中で最も古い1号銅鐸。高さ26.6cm、底幅15.5cm、重さ約2kgの銅鐸が展示用の土台につるされ、自由に鳴らすことができます。

この機会に、弥生人も聞いたであろう銅鐸の音色をぜひ楽しんでください。



▲市役所入口に銅鐸の復元品を展示しています